



# 弁護士会の国際活動

## 第5回 LAWASIAハノイ大会参加報告 IBAトロント年次大会参加報告



### LAWASIA ハノイ大会参加報告 — 当会の国際連携強化に向けて

国際委員会 幹事 齋藤 輝夫 (44期)

2025年10月11日から13日まで、ベトナム・ハノイにて38回LAWASIA年次大会が開催され、当会からは的場美友紀副会長、津村佳奈国際委員会副委員長及び筆者（同幹事）の3名が参加した。LAWASIA（The Law Association for Asia and the Pacific）は、アジア太平洋地域の法曹をつなぐ国際的ネットワークで、法の支配、人権擁護、司法アクセスの向上等を目的として1966年に設立され、各国弁護士会や個人会員から広く支持を得ている団体である。

日本からは当会のほか、日本弁護士連合会（副会長ほか囑託2名）、第一東京弁護士会（副会長）、第二東京弁護士会（副会長）、福岡県弁護士会（会長ほか）などが出席し、日本の存在感が示された。初日の午前にはロッテホテルにて評議会年次会議（Annual Council Meeting）が開催され、会長・事務総長報告、財務報告、新規加盟団体の審議、会則改訂、フィジーやネパールの現地法曹に関する懸念、年間声明の確認、役員選挙などが行われた。当会、一弁、二弁、福岡の参加者は鈴木五十三LAWASIA元会長のご配慮で傍聴し、全員が簡単に自己紹介する機会を得た。

午後からは本大会のプログラムが始まり、ダイバーシティ、裁判所の役割、ICC（国際刑事裁判所）の重要性を扱う3つのプレナリーセッションが続いた。2日目以降は同時時間帯に複数の分科会が並行し、ADR、環境法、データ保護、競争法、国際通商、憲法、金融、人身取引、エネルギーなど、地域が直面する幅広い課題が議論された。最終日には法律事務所経営、女性弁護士、家族法、知財など実務的テーマも取り上げられ、夕刻のパネルディスカッションでは



「法の支配が脅かされる時代における国際会議の役割」が議論された。日本からの若手弁護士も多数スピーカーとして登壇し活躍した。

今回の大会は、2018年に友好協定を締結しながら交流の進んでいなかったベトナム弁護士連合会との関係強化にも絶好の機会となった。12日朝には同連合会会長のDo Ngoc Thinh氏ほか幹部と面談し、両会の友好深化に向けた意向を共有した。当会から共同セミナーの可能性などを提案し、同連合会からは伝統版画を贈呈され、当会からも赤富士の風呂敷とべんとうらのぬいぐるみを贈った。

また、大韓弁護士協会（Korean Bar Association）主催の“Korean Night Reception”にも招待され、副会長を含む韓国側幹部やソウル弁護士会会長らと意見交換を行った。同会とは当会会長から関係構築を進めるよう方針が示されており、今回の交流は来年度のソウル大会に向けても重要な一歩となった。

本大会への参加を通じ、アジアに共通する法的課題への知見を深めつつ、各国の法曹との交流を通じて当会のプレゼンス向上にも寄与できたものと思われる。来年度のソウル大会にも理事者や国際委員会委員が積極的に参加し、国際連携の一層の発展に繋げていきたい。



# IBA トロント年次大会参加報告

国際委員会 委員 浅田 一樹 (73 期)

1. 2025年11月2日～11月7日、カナダのトロントにおいてIBA（国際法曹協会）の年次大会が開催された。私は、当会の国際委員会の一員として同大会に参加してきたので、その概要と現地での立ち回り方のコツを、実体験を交えながら報告する。

2. 国際会議では、朝～夕まで様々なテーマを題材とした勉強会（セッション）が開かれる。参加者は、興味のある分野のセッションを聴きに行き、時には登壇者に質問をぶつけて議論を交わしたりしながら、理解を深めていく。

国際会議の規模は大小様々だが、今回私が参加したIBAは世界的にも最大規模の法曹団体である。今回のトロント大会は、世界中から5～6,000人ほどの法曹関係者が集まった。

「勉強会」と言うとお堅いイメージを持たれるかもしれないが、個人的にはあまり難しく考える必要はないものとする。セッションを最初から最後までじっと座って聴講している参加者はどちらかと言えば少数派である（録音しながら熱心にメモを取り続けている参加者ももちろん一定数いる）。私が今回参加したセッションにも、モデレーター（司会）を務めるベテラン英国紳士弁護士の老練な進行に場内が大盛り上がりとなり、スタンダップコメディの会場ようになったものがあった。終いには、私の隣に座っていたナイジェリア弁護士がインスタライブを始め、私も画面の向こうのリスナー達となぜか交流することになる等、二度とない経験となった。国際会議では、こういった海外特有のノリを味わうことも多くあり刺激を貰える。

3. 私は、個人的にはセッションへの参加と同程度に、現地での様々な交流も重要であると考えているが、5,000人を超える参加者がいる中でどのように立ち回るべきか分からないという方もいるのではないかとも思うので、私なりの攻略法をお伝えした

いと思う。

まず、毎回私が重視しているのは、“日本人グループで固まらない”ということである。海外の会議で単独行動するのは心細いが、1人で行動していると、特に国際会議の序盤は、同じく様子見をしている他の参加者から声をかけられる（あるいは自然と目が合い会話に発展する）ことが多くある。このように、半ば強制的に国際会議の荒波の中に身を置くことでその雰囲気存分に味わうというのが、個人的に考える攻略のカギの1つである。

次の攻略のカギは“Committee”である。上記でお伝えした各セッションには、それぞれに必ずその運営等を取り仕切っている委員会のようなものがあり、それが“Committee”である。すなわち、同じCommitteeが主催するセッションに何度も参加し、そこで交友を広げていると、徐々に顔見知りができ友人も増えていくのである。私の場合、初日に“Young Lawyer's Committee”のセッションに連続で参加し、そこで友人を増やしていった。友人が増えると、色々な情報も回ってくるようになり（セッションとは別に有志で開催される市内ツアーやカクテルパーティー等の情報）、そして、得た情報を積極的に他の仲良くなった参加者たちにも伝えていき輪を広げていくことで、交友がより深まるのである。

私も、上記2点を念頭に置きながら行動を続けた結果、多くの友人と知り合い親交を深めることができた（先日も早速、IBAきっかけの友人が事務所に訪問してきて再会を果たすというイベントが発生した）。そのおかげもあり、最終日のClosing Partyまで息切れすることなく楽しむことができた。

国際会議への参加経験がまだあまりないという皆さまとしても、以上の報告を一読して、国際会議に対するハードルが少しでも下がり、ご興味を持っていたら嬉しく思う。